



孝弟法海并面奉
 及一洗洗新室
 是移事知人
 不成不成知眼平

木綿忠

本朝世事談綺卷之五目錄

人事門

先生	苗字	普請	大系女御祥事	奔馬躍	里歸	月代	采和
藪醫	佛工	大工左官	道中馬駕替事	傾城	勝山	繁結床	觀世錦
人參切能	蔭繪	瓦工	池新念佛	上頭	辰叔風	太平記讀	國十郎文

○ 雜

席 馮 立 一 里 環 本 曾 公 臺 本 同 屋 興 擣 元 與 寺 四 十 二 厄 茶 湯 線 香

夏 門 辻 占 田 圃 渡 抗 大 名 所 烈 這 入 小 兒 鄙 葵 子 生 月 數 及 摺 人 字 訓

假 山 東 下 高 港 長 崎 港 水 車 雜 役 馬 摸 具 和 捉 迷 藏 一 石 云 事 百 万 遍

本朝世事談綺卷之五



人事

○ 先生

礼記曲礼註云先生之德蓋有以合於天者乎故子先子生之

○ 較 醫

世俗未熟の處をいして較醫いりる本派野平

菊岡沾原述

醫をかり兼^そ末^{すゐ}の醫^いをかりて

人參切能

人參の功いなり高く尊まるといふと實文延室乃
こゝ教系通玄といふ良醫如龍人參の功能を考へ大要
治るれを執り衆人の余計服するを戒め其効効せよ
而後曲中藥論に室是より大切なる事と評するその頃
室所修秘伝孫八方いふ事と求むそのら境を察せ
する所にあつて人參を立つてそれ今この處に於たり
○ 苗字
延文應永の頃室所敏時代より起る鎌倉時代をいふれ
くの位品のみ式形世に流行して後又苗字浦上の
在下をえて姓をきくと太平記の頃よりあるなり

○時繪

新世府佐、高倉院の時代偶あきもその記
正を云へば上古の事、世に全きものも今の
ありし事、事ある所の所、有縁に事ある所、
時々の意を時代物と稱し、幸の所、事ある所、
奈良、新、菱田、板、中、右、左、水、を、家、と、し、

○書請

家を道るを書請といふ、汝門の語なり、書請人
を指請し、其地力を得て事をせしむ、成なり
救世清規云、普請之法、蓋上上均力也、分附堂司
行者、報衆、掛普請牌、乃用、小斤紙、書貼牌上、

○大工左官

飛騨の内匠といふを世に俗人と云ふ、あり、飛騨、大工
の、い、れ、飛騨の内匠なり、古い、い、れ、大工、なり、
塙直、大工といふ、宮室の造営、に、大工、て、何、の、内、を
い、れ、を、巧、塙の、い、れ、乃、何、と、い、れ、
む、な、り、り、り、曾、有、金、書、塙、通、東、東、夢、華、深、巧、塙、者、

○尾工

尾、崇、峻、帝、の、時、に、事、久、く、江、戸、に、お、き、
去、る、り、め、て、あ、る、を、や、愚、編、江、戸、砂、子、に、い、事、
又、尾、に、巴、の、紋、を、作、り、水、の、縁、し、巴、の、水、の、巻、状、を、漏、ら、
蜀、の、あ、い、れ、水、の、縁、し、上、水、波、風、を、あ、い、れ、
や、古文、字、の、巴、の、紋、を、い、れ、蜀、の、あ、い、れ、巴、蜀、と、い、

元の唐草もみ草し正親町殿沙汰巴いあひさう
いふ人よりちうつをみわ新ぢうの六角からあを
うづる天井鴨居鴨居蛙膜やうる水の路をう
堂塔の龍雲水を畫もおゆりしき金で火難
を避るの祈りし

○大原女脚紐を糸合事

平相國の女建礼門院世をひひて大原より
新よりさうし居内侍下りの運命を賣てあふ
ぎとまねやとつひく人々官女なれど御健を
く事をさしにむすも合せりやうめ
今にまふ事女むし腫めて合せりまげ遠風し
舊跡の平生の幸光院と云僅なる榮華なり

中より
ひさ
乃教
わのほり
職人
一
道中
相
奴
ひ
う
あ
結

中より
ひさ
乃教
わのほり
職人
一
道中
相
奴
ひ
う
あ
結
人
里
さ
ち
な
と
せ
な
ら
ん
て
京

大津の土人等早とて果軒の末に於て中を
て双方道の遠近をさうり荷物の輕重に
ひき思をなほしめて馬作興の世話をする
事。新あり馬士等早の端より早く收をせ
てあきよりさういふ海よりさういふ事出らんなり
その奴等今よりあつて器具をさる

○池部念佛

葛西の土人証太郎、教をすてて確念佛を
江戸の土人、御仁を葛西念佛と云池部と
いふ、實水の云池部と云、又人の法部あ
け、海を命する人、あつて、新法部と云池部と
とせり、今よりさうあり、新法部の名目なり

池部と云、さういふ、異なり、今より
をさういふ、さういふ、池部と云、一、池部
た、あつて、さういふ、池部と云、一、池部
尻をさういふ、さういふ、池部と云、一、池部
引さういふ、さういふ、池部と云、一、池部
さういふ、さういふ、池部と云、一、池部
さういふ、さういふ、池部と云、一、池部

○麻鳩躍

寛永の頃、法部、疫病あり、常陸國麻鳩の神
興をさういふ、さういふ、池部と云、一、池部
その患を深く、さういふ、池部と云、一、池部
さういふ、さういふ、池部と云、一、池部



傾城
 哲夫成城哲婦傾城婦有長古惟厲階
 女乃桑木
 傾城
 哲夫成城哲婦傾城婦有長古惟厲階
 女乃桑木

武松の夢めて記て糸けの類云小方子
佳くあり給ふて独立一ふ顧る人の世を傾て
我の顧る人の世を傾て下路の世をとりて
巨物たる者ありて解てつむるせしもの

○上頭

娼女ありてあそ森をへまきあるを水とて俗あつふ
商人の荷物なり取らるありてあそ店に出入るを
あそといふなり妓女の色を衝きむるをかくを
こゝそ毒叢談曰女子既に解りあつて上頭と
しこれに誘ひて解りあつてあつて日本に女子あ
る色さうのひて後髪を敷きけりて業をさしむる
事ならんといふもさうありてつむるもの

○里歸

娼女の二日かたて新婦父母の家へけり
もあつ五難姐云漢の妹の二月の男を合し娼女
をさうあ五月より教のあつて又母をさしむる
歸寧といふ大いこれ二月の後女婿同くして又母の
あつてを四難といふこれ二月の日本にもさしむる
その母のいふ事あり

○将山結

其の髪はけりありて縁の須吉系巴屋の結ふ
とく女ゆひうありて又徳田といふ月を結ふ
徳田の名の女は世をさしむるありて
いふありといふ事あり

○辰松

男其の髪かみのひや時とき々々々々と髪かみては海うみへ入いる
おたり又また國くにくもその風ふうあり辰松辰松風
とてええ結むすむとてく長ながく髪かみて月つき代しろのしろく
たりわけ曲まげのしろをえりて風ふうあり辰松辰松風
あれど髪かみのく曲まげのしろ襟えりへ入いる乳ちちをえりて
ゆき風ふう頂うへのしろをえりてく髪かみをえりて
るんて曲まげをぬりてく髪かみをえりてく髪かみをえりて
なるんてく髪かみをえりてく髪かみをえりてく髪かみをえりて
く髪かみをえりてく髪かみをえりてく髪かみをえりてく髪かみをえりて

○月代

月つき代しろを利きすハ孫そん余あ小こ東とう純じゆん權けんの頂うへのしろ相あひ傳でんフ
泰たい時とき頂うへ

その昔むかし本ほん邦ぱうの尊そん早はや塔たつ惣そう髪かみて孫そん余あ小こ東とう純じゆん權けんの頂うへのしろ
く山さん海かい經けい日にち東とう海かい有あり黒くろ苗めう國こく其その俗しやく婦ふ人にん
苗めう悉しつ黒くろ漆しつ足あし本ほんの事ことし貴き賤せん一いつ統とうし
云い家けと世よりの辰しん松そうくされ男おとこの髪かみをえりて
事ことを禁きんむる事ことをえりて乳ちち糸いとをえりて苗めう痛いた
とかりけりて月つき代しろを利きすハ孫そん余あ小こ東とう純じゆん權けんの頂うへのしろ
時代じだいの髪かみを抜ぬく信しん長ちやう云いの頂うへのしろ利きカハ
梅うめの髪かみをぬく信しん長ちやう云いの頂うへのしろ利きカハ
眉まゆ利きとて神かみの髪かみをぬく信しん長ちやう云いの頂うへのしろ利きカハ
乃すなは眉まゆを利き具ぐ也なり信しん長ちやう云いの頂うへのしろ利きカハ
大おほきよとて今いまの利きカハ
堂どう上じやう方ぱうの元げん腹ふくとて眉まゆを利き具ぐ也なり信しん長ちやう云いの頂うへのしろ利きカハ
本ほん邦ぱう上じやう代だい乃

正三

子

九

○
發
錯
床

○太平記讀

江戸にていかなるの流れたと云ふ始し年々浅草市門
へ出て太平記を講ずといふものあり理屋抄と云ふ史記の
海老名氏の書を以て講ずたり又その次赤松青龍軒といふ書
懐明の芝居をかき（永昌元）に記して軍法を講ずと
京都より系永暢といふ者世に理屋抄といふ書あり

寛永のころ北國より法花法印日勝より彌名和仙考を
長年遠縁よりつて人々を傳へり千段大全綱目
等と出たり参考太平記を註中す

○ 榮和

追世大明の陳元寶といふものなり、
 國正寺に寓する所、殊に清浄な
 と云ふ人の志、浪々して、かの寺にありて、
 大明の人を捕ふ術あり、その法は、
 ありとゆひ、是よりいと云ふ人の士、
 是をまゝしておのく、術を以て、

○
觀ミ
世セ
綏ス

文明の二つ観。世阿弥式三毒の爲ハ鳥帽子の懸緒

○辻占

泉列場より半部なる波比の市所湯屋所と云ふ
の大小路の辻を占つとふに八極泉の境目南水の分岐
なり古（安倍清明）の所を遇て後世のたふれと占の
書を埋めたりといふ所へは辻の安く吉吉を占ふ違ふ
なり是辻占の起源なりと云ふ法に依る事と云ふ

○假山

日本紀推古帝の時百濟國の仕人諸子等といふ
ものといひて半部を占ふに八極泉の境目南水の分岐
の二流あり天龍寺の因組夢窓國師水心を喜ぶ
天龍寺の妙ありを後流に思ふ龍泉寺西寺寺
乃假といふ此所の作し大徳寺の大門院ある雙林寺の

假といふ東の後の喜朋真相といふを假の山と云ふ人
なり龍泉寺の夢窓の細川勝之の作といふ

○一里塚

正親所院天正年中一里の行程を定めし地の子
六合を表して二十六町を一里といふ法に依る事と云ふ
なり一里といふは松林をいふなり信長といふ
小の竹のまをいふなりといふと云ふと云ふと云ふと云ふ
よのまゑのまの田なりといふと云ふと云ふと云ふと云ふ
なり一里といふは五町といふなりといふと云ふと云ふと云ふ
一里といふは二里の城といふなりといふと云ふと云ふと云ふ
一里といふは一里の城といふなりといふと云ふと云ふと云ふ
を伸く今の千六町といふ奥列のいふなりといふと云ふと云ふ

六町一里の所ありといふに鎌倉の七里が廣く其間
あり一六町一里の割しつものなるを云ふに親王
元日の奏賀大極殿より多田の作道よりなる
十里余あり是今の二里し

〇田圃

孝徳帝の二年より中戸籍什帳廻田收授の法を
作る田長二十歩廣さ十二歩を反といひ一歩は六尺
なり中古の法は六尺を歩といふ今云ふ京間なり
天正年中に改りて復六尺の古法となり

〇東の高水

寛文七年無きより慶長十六年に南無り以て
所に記しとてなり



世集

人々々々々

問
屋

今更山に同字あり

這入

神代官展の記

雜
收
馬

子に於て新筆の故とるものありて古筆

報復の牛とあり犯牛の衆車に引ひし難事収束する
人なりしあり世人難事とて馬に引ひて牛を引ひ

○輿擣

後多田院文治三年建仁寺の宗西和尚宗一より
建久二年の賜る禪法を弘め建仁二年に洛建仁寺と
する大校を立つる宗西人丈に下をて我々も
てあぐりしとて念ふく唱ふとこれなる
宗西賜号千光院所とて建仁寺の開祖なり

○僧都

依中國湯の寺の宗實僧都民家奴の毎田
りし事を世に事をもつて民の苦し
脚くよん入る事をもつて農具のあり

○小児

世俗婦の令ふと小児とあり江流の云ふ月夜
を供と菓子の童女の未婚せざる若年童女
その頃求て小児を月夜一統の所を
沙弥と酒子入るを居る名求菓の女官
沙弥と酒子入るを居る名求菓の女官
より求るゆかりの沙弥と酒子入るを
菓の所を又陪膳はて上へ供とて
よめてけりし小児とて小児とて

○撰具和

毛炙を依て炙とて穀一名野合と
又大は毛色龍龍いひて

龍あり、雲を漲と翼となり、収と、是のまゝく
編幅に似たり、面をく、龍あり、尾七、く、く、
果、雲を、く、く、く、く、く、く、く、く、
昼、深、く、く、く、く、く、く、く、く、
を、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
土人、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、

○元興寺

大和出考云、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、

か、く、く、く、く、く、く、く、く、
い、童子ある、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、
今、小、吹、を、賺、恐、の、く、く、く、く、

○鄙 葵

寛文十二年の、お、お、お、お、お、お、お、お、
醒、く、く、く、く、く、く、く、く、
お、く、く、く、く、く、く、く、く、
お、く、く、く、く、く、く、く、く、
お、く、く、く、く、く、く、く、く、
お、く、く、く、く、く、く、く、く、

小沢のたつひと目を巾にけりや
 日本めて七八年朱の天子のひびきありし
 致虚難姐日唐のをふと楊美妃恒の飯月を此
 おもて錦の帕とひて目をつと其る方丈をらひて
 互にお提するをふりひきてる金糸をたつ事
 安んじとも楊美妃その體つらとやとあつと上恒子
 帝をうとつとつと多し
 満宮の人世をけくたふ
 是を提速藏しと日本めたりし

本流よりなる事し可二と云ふ文字のひきま
よりいじ事と云ふ又男子の事一歳乳がらる

○
子生月數

孔子家語

○一石

茶湯

○
竹及
摺

元御襤たふ

一
像子
用

百
萬
遍

天子より弘法

久禾田賀朝の執事

謂天高踏

天高——さうさうさうも石合の如き

謂地廣踏

唐さうばうあやする是や田草取 貞佐

天時不如地理

地理不如人和

人のわいさくさうけつめさう 治原

あまこちのあまこちさういあはれ部族の癖

さうさう人の用さうさう紙巻を焚く

大尾

五之巻軸

后序

夫^{ハカリ}衡^{ケン}の推^{ツキ}より始め車^{クルマ}の輿^ヨをさほむ

漸^{シビ}りて權^{ケン}錘^チをその^{その}力^{リキ}代^{ダイ}の量^{リヤウ}

目^メ以^モ元^{ゲン}緒^コよりさうさうの輿^ヨにさ

る^る中^{ナカ}に世^セの輪^{リン}輻^{フク}蓋^{ガイ}軫^{キン}を得^{ウケ}一切^{イチケツ}此

事物^{ブツモノ}億^億万^{マン}の中^{ナカ}にゆ^ゆる^るを^を得^得

世^セの量^{リヤウ}に^にあ^ある^る山^{ヤマ}さ^さの^の事^{コト}成^{ナリ}

談、其緒、其意、其題、其號、其而已

東都神田誹林雀下沾漁書

品物 原始 增補世事談

天正慶長より東三明年中やせ
又行々、事物の起る、な実を
まのくあつめ、意く、法を、入る、
大成を、全部十冊、近刻

享保十九甲寅正月梓行

書林

江戸 西村源六
大阪 高橋平助

文政十戌子年未藏

高橋俊興

全五冊

4000
一
五
四冊

